

マルコによる福音書 8 章 22 節～30 節

2016 年 9 月 22 日

古本 靖久

1、聖歌 464 番 「恵み深き 主のほか」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 77 ページ）

4、テキストの位置

前回の場面には、弟子たちがイエス様のことをまったく理解できない姿がありました。

イエス様は弟子たちに対して、「まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。覚えていないのか」と叱りつけます。

福音は外の世界へ	6:30-44	食事の奇跡
	6:45-52	水の上の顕現物語
	6:53-56	まとめの句
	7:1-13	父祖たちの伝承とは
	7:14-23	旧約聖書の食物規定
	7:24-30	福音は異邦人の元にも
	7:31-37	異邦人の地でのいやし
	8:1-10	二度目の供食物語
	8:11-13	ファリサイ派の人々の不信仰
	8:14-21	パンの奇跡に対する弟子の無理解
8:22-26	目の見えない人をいやす	
受難への道	8:27-30	イエスは何者か

そして今日の場面では、イエス様は目の見えない人をいやします。そこには肉体的ないやしだけでは意味が隠されているようです。

また後半になると、イエス様とは何者なのかという話題になります。福音書はここから、弟子たちが悟ることのできなかつたイエス様の本当の姿を描いていきます。イエス様は一体何者なのか。わたしたちとどう関わりがあるのか。受難への道に向かう中で、そのことが次第に明らかにされていくのです。

5、節ごとに

◆目の見えない人をいやす

8:22 (そして) 一行(彼ら)はベトサイダに着いた。(そして) 人々が一人の盲人(目の見えない人)をイエス(彼)のところに連れて来て、触れていただきたいと願った(う)。

イエス様の一行は、ベトサイダに着きます。ベトサイダには、すでに6章45節のときに舟で向かっていました。ところが湖の上を歩くイエス様の奇跡のあと、一行はベトサイダではなくゲネサレトに着きました。何事もなかったかのように、ベトサイダのことは忘れ去られていました。しかしようやく、彼らはベトサイダに来ることになります。



ベトサイダには目の見えない人がいました。前にも言いましたが、ユダヤは乾燥した地域が多かったために、目の見えない人は多くいたようです。また聖書の中にも、目の見えない人を保護する掟が数多く見られます。そのような決まりを作らないといけないうことは、逆にいうと目の見えない人は自力で生きていくことが大変難しかったということです。絶望の中でしか生きることのできない状況に、彼らはいました。

その彼に手を触れてほしいと、人々はやってきます。前には、「イエス様の服にでも触れればいやしていただける」と思った女性もいました。それは触れることによって、奇跡をおこなう人の力が病人に伝わると考えられていたからです。礼拝の中でおこなう祝福の祈りも、そのような一面があるのかもしれませんが。

8:23 (そして) イエス(彼)は盲人(目の見えない人)の手を取って、村の外に連れ出し、そ(彼)の目に唾をつけ、両手をその人(彼)の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。

7章31節～37節には「耳が聞こえず舌の回らない人をいやす」記事がありました。そのとき同様イエス様は、いやされる人を人々の中から連れ出し、唾を用いていやされます。そして26節ではイエス様が起こした奇跡のうわさが広まらないようにと命じられます。

今回も使われた唾は、現在の日本でもそうであるように、当時の社会においても家庭治療薬として使われていました。ただ前回のいやしの時には「エッフアタ(開け)」と命じられたのですが、今回イエス様は、「何か見えるか」という問いかけをされています。

8:24 すると、盲人（目の見えない人）は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようにですが、（に）歩いているのが分かります（見え）ます。」

イエス様にいやしてもらった人は言います。「木のように歩いている人が見えます」と。この言葉を聞いて、どう思われるでしょうか。今まで人を見たことがなかったので、表現の仕方が上手ではなかったのでしょうか。

そうではありませんでした。続きを読んでいけば気づきますが、この段階ではぼんやりとしか見えていなかったのです。ではなぜこのような記述があるのでしょうか。このいやしが大変困難だったということを強調したかったのでしょうか。そしてその困難をも打ち破るイエス様の力の大きさも言いたかったのでしょうか。しかしこの書き方では、イエス様は一回でいやすことができなかつたという逆の意味にも取られそうです。

8:25 そこで、イエス（彼）がもう一度両手をそ（彼）の目に当てられると、よく見えてきていやされ（回復し）、何でもはっきり見えるようになった。

イエス様はもう一度、彼の目に手を置かれます。その行為によって、彼は「よく見えてきて」とあります。この言葉には「正しく見た」という意味もあります。つまり、今までは見えているようで本当は見えてはいなかつたものが、再びイエス様に手を置かれることで、ちゃんと理解することができるようになったと考えることもできるのです。

このような二段階のいやしは、他には出てきません。マタイやルカ福音書にもまったく登場しません。しかしこのいやしの記事は、弟子たちの姿を象徴しているともいえます。弟子たちは今まで、イエス様と共に行動し、様々な奇跡を目の当たりにしていながら、イエス様のことを理解することができませんでした。ちゃんと見えていなかったのです。

その弟子たちに対しイエス様は、ご自分の受難を予告し、十字架へと進んでいかれます。その歩みが 31 節以降に書かれるのです。つまり「見えているようだが、実はきちんと見えていない」弟子たちの目を開かせるために、イエス様はこれから歩んで行かれるのです。

8:26 （そして）イエス（彼）は、「この村に入ってはいけない」と言って、その人を家に帰された。

しかしイエス様は、自分のなされたことが広まっていくことを良しとされませんでした。それは肉体のいやしの奇跡だけが大げさに吹聴されてしまうと、イエス様が伝えようとされた福音が正しく伝わらないからなのかもしれません。

<ここまでの箇所から>

マルコ福音書の最初からここまでを、第一部と考える人がいます。イエス様はガリラヤで活動していく中で、ご自分を現されていきました。しかし一番近くにいた弟子ですら、その本当の姿を理解することはできませんでした。



マルコ福音書はイエス様が何者かわかるのは、復活のイエス様に出会ったときだと伝えます。イエス様に出会うことはできました。そして今度は、復活のイエス様に出会っていくための受難の道を進んでいくのです。この道によって、弟子たちの、そしてわたしたちの目ははっきり見え、イエス様を理解することができるようになるのです。

わたしたちも、自分の力で見えるようになることはできません。イエス様に触れていただくことが必要です。聖書を通して、祈りを通してイエス様と共に歩み、復活のイエス様に出会い、見える者にされていく。そのことを願いながら、後半部分に進んでいきたいと思えます。

◆イエスは何者か

8:27 (そして) イエスは (と)、(彼の) 弟子たちと (は) フィリポ・カイサリア地方の方々の村(々)にお出かけになった。その途中(道すがら)、(彼は彼の) 弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と(尋ねて)言われた。

フィリポ・カイサリアとは、ヘロデ・アンティパスの弟であるフィリポがつくった町で、彼はそこを自分の都としたそうです。もともとはパネアと呼ばれ、多産の神パンの聖所があり、皇帝礼拝もおこなわれていたそうです。

地図で見ると、ガリラヤのかなり北の方に位置するのがわかります。

ここでイエス様は弟子たちに、自分のことが人々によって、どのように言われているのかを聞かれました。

それは人気調査でもなければクイズでもありません。通俗的な見解を確認しているのです。



8:28 (そして) 弟子たち(彼ら)は(彼に)言った。「『洗礼者ヨハネだ』とっています。ほか(の者は)に、『エリヤだ』と言う人も、(他の者は)『預言者の一人だ』と言う人もいます。」

マルコ 6 章 14～16 節にはこのようにありました。

「イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」そのほかにも、「彼はエリヤだ」と言う人もいれば、「昔の預言者のような預言者だ」と言う人もいた。

これらの考えは、広く一般的なものだったのでしょう。弟子たちはどこかで聞いたそれらの見解を繰り返しました。

8:29 そこでイエスが(彼は彼らに)お尋ねになった。「それでは、あなたがた(自身)はわたしを何者だと言うのか。」ペトロが(彼に)答えた。「あなたは(こそ)、メシア(キリスト)です。」

「それでは、あなたがた自身は」、このイエス様の言葉によって、弟子たちは前節の一般の人々とは区別されます。「あなたはどうなのだ」、その質問は、深く胸に突き刺さります。

そこで答えるのが一番弟子とされていたペトロでした。彼は言います。「あなたこそ、キリストです」と。キリストとは「油注がれた者」を意味するヘブライ語「メシア」のギリシア語訳です。新約聖書はもともとギリシア語ですから、原文では「キリスト(クリストス)」です。ところが普通名詞だった「キリスト」がいつの間にか固有名詞のように使われるようになったため、新共同訳聖書では混乱を避けるために称号として用いるときは「メシア」と訳しているそうです。

さてこの場面、ペトロが人類で初めて信仰告白をした素晴らしい場面だとよく言われます。しかしよく読んでみますと、イエス様はペトロをまったく褒めていません。それどころか、30 節でイエス様はペトロを叱りつけます。別紙にあるように、マタイ福音書はペトロを過剰に持ち上げます。その印象に引きずられて考えてしまうのかもしれませんが。

イエス様は、「あなたがたは…言うのか」と尋ねておられます。「思うのか」ではないのです。実際に弟子たちは、イエス様のことを「彼はキリストだよ」などと言いつらしていたのかもしれませんが。そのことをイエス様は、苦々しく思っていたのでしょう。

マルコ福音書では、弟子たちは徹底的に無理解な人間として描かれます。もしこの時点でイエス様のことが理解できていたならば、十字架の前に見捨てたりはしなかったでしょう。

8:30 するとイエス(彼)は、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒め(叱りつけ)られた。

新共同訳聖書で「戒め」と訳されている語は、「叱りつける」という大変厳しい言葉です。相手を脅しつけるようなときに用いる言葉で、「罪を罰する」という意味で使われます。イエス様が悪霊を叱りつける場面でも用いられている語です。つまりイエス様は、「そんなこと、あんまり人前でいう者ではないですよ。しょうがないですね」とやんわりと正したわけではないのです。「なんてこと言ってるんだ。本当にわかってやっているのか。こら！」と唾を吐きながら大声で叫んでいたのです。

もし 29 節を「ペトロの正しい信仰告白」だと理解していたら、この 30 節とはつながりが悪かったと思います。新共同訳聖書はつながりの悪さを少しでも和らげるために、「叱る」を「戒める」と変えたのかもしれませんが。またマタイ福音書が書かれた地域では、先ほども言いましたようにペトロが持ち上げられていました。彼らにとってマルコの記述は耐えられなかったのでしょうか。マタイ福音書の中でイエス様は、ペトロに幸いだと告げ、その岩の上に教会を建てると約束し、さらに天の国の鍵まで授けてしまいます。

でもマルコ福音書が伝えたかったことは、弟子たちがイエス様に叱られたということですから。そしてそれは、弟子たちがまだ、イエス様を正しく理解していないからだったのです。

<今日の箇所から>

「見える」ということはどういうことなのでしょう。わたしたちは聖書を読み、祈り、賛美する中で、イエス様のことを少しでも多く理解しようとしします。しかしイエス様の姿をぼんやりとしか見ることのできない自分を感じることもあるのではないのでしょうか。

今日の箇所、前半では目の見えない人が二度手を置かれ、はっきりと見えるようになりました。後半では、いつまでたってもぼんやりとしか見ることのできない弟子たちの姿がありました。どうしてこの二つの物語が並べられているのでしょうか。

それは弟子たちの目がいずれ開かれることを約束しているからではないでしょうか。復活のイエス様との出会いによって弟子たちの目に再び手が置かれ、彼らの目が開かれる。同じようにわたしたちの目も必ず開かれます。たとえ今はぼんやりとしか見えていなかったとしても、イエス様はその手を伸ばして、必ずわたしたちの目に触れてくださる。その約束を信じて、わたしたちは歩むのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は 10 月 27 日(木)10 時 30 分からです。「第一回受難予告とイエスへの信従」(マルコ 8 : 31~9 : 1) について学んでいきます。